

三 我物と思へば輕し傘の雪

嘗て獨逸聯邦の或王國の王様が、國民に道義があるかないかを試すために夜中人知れず二個の大きな石を街の眞中に据ゑて置いた。すると第一に農夫が荷車、第二に乗馬の人、第三に一人の兵士が通り、其の後來る人もく一ヶ月間、誰一人之を罵らぬもの、怒らぬもの、呶かぬものはなかつた。それだのに誰一人之を取り除けやうともしない。丁度四週間に、令して諸人を此處に集め、「予は四週間に此の石を此處に置かして、國民に道義心ありや否やを試したが、幾萬の通行人の中、誰一人として、此の石を此處に置くのは悪いと云はぬものはなかつた。教育家・宗敎家・道徳家・社會改良家・慈善家・貴族・富豪・士農工商、あらゆる階級の人々は通過したけれども、誰一人之を取除けやうと手を出した人はなかつた」と、痛く慨嘆せられ、悪いと知りつゝ改める者もゐないか、國中に世を思ひ人の爲に吾身を碎く者はないか。さらば予がこれから取除けると、御身躬ら手を下されると、石の下には一つの袋が置いてある。袋には「石を取除けし者に此の袋を與へん」と記されてある。袋を開けば中に、寶石入の指輪と二十枚の金貨とが、這入つてあつたと云ふことである。何人も何事も、思付くことは易いが、さて之を着手し繼續することは至つて難い。是れその必要と責任を感ずることが、痛切でないからである。他人の富や榮譽や幸福を幾ら羨んだからとて、自分が正しくその實行者・努力者・獲得者でなくば、何等の所詮もない。不自由々々不足々々で、世の中を過すも同じ事。不自由なら何故自由にせぬか。不足なら何故満足にせぬか。「吾は是れ已成の佛、汝は是れ當成の佛」やつてやれぬ事はない。とはいへ、自分が正しくその必要を感じたならば、平然としては居られまい。非常に美しく佛法を喜ぶ成年の細君に、至つて不法義な呑氣な細君があ

つたさうな。細君は裁縫に堪能なので、村の娘子供を何十人と引受けて裁縫の教授をして居られる。主人は一緒に御法義を喜んで呉れと頼んでも、一向取上げぬ。「極樂参りは結構でも、信ずる人が少いから、往く人が少く淋しからうと思はれます。淋しく連がないのなら、折角の樂みも樂みになりませぬ。地獄へは澤山な人が行くから、私一人苦しむのなら恐ろしいが、皆一緒なら辛棒も致します。ですから聴聞には得参りませぬ。特に慙うして澤山な子供を預つて居る私が、御説教聞きに行つたりして居ると、子供を遊ばさねばなりません。すれば親達に申譯がない。地獄の苦も大勢なら左程でもありますまい」と澄し込んで居ます。主人は何とかして本氣にならせたいと、種々考へた末。翌日針仕事をしてゐる最中へツカくへ行つて、頭をポカリと打つた。細君大變に怒り出した。主人は「さう怒るものではない。世の中には女房を打つ亭主も澤山ある。又亭主に打たれる妻もお前一人でないから、辛棒が出来やう」と云つて取合はぬ。してまた翌日もツカくと来て、足でもつて針仕事をしてゐる細君の横腹をウンと云ふ程蹴つた。細君顔色をかへて非常に怒り出した。「マア、さう怒るものではない。世間には女房を蹴る亭主も、亭主に蹴られる女房も多い事。お前一人ではない。それを思うて辛棒しろ」とあつて見返りもせぬ。それから四五日も經つと、今度は仕事の最中へ奥の間から出て来て、細君の頭髮を引摺み家中を引き廻して苦めた。處が細君火のやうになつて、涙ながらに怒り出す。「モウこんな處には一時も居堪りませぬ、歸ります離縁して下さい」と血相かへる。主人は面を柔げて、「マアさう怒らずに、私が悪ければ幾重にも過るから、此處へ座つて私の云ふ事を聞いてくれ。先月から屢お前に、御法義を喜んでくれ、今生だけの夫婦でなく、未來まで一緒に蓮華の御座へ参らせて頂きたいと思へばこそ、斯く

たのんだのに、地獄は苦しくて仲間があるから辛棒すると云つたが、お前は、亭主に打たるゝ女房も、亭主に蹴らるゝ女房も、頭の髪を持つて引つ張り廻さるゝ女房も、世間に幾ら澤山あつても、實際自分が其の身になつたら苦しからう辛からう。何卒私と共に慈悲を喜んでくれ」と、涙ながらに諭したので、細君も共に喜ぶ身となられたさうである。

實際自分がさう云ふ苦しい目に遇ふてみねば、眞實の味は解らぬ。また遇ふた時になつて、あせつたとて最早間に逢はぬ。「昨日迄は人の事ぢやと思ふたに、俺が死ぬとはこいつ堪らぬ」愈自分が苦しい切羽つまつた場合には仲間があるの無いの、そんなことが云うては居られぬ。速に此苦が逃れたのである。一刻も早く脱却したいのである。世間には多くの鞭がある。四苦八苦は絶えず身に逼つて来る。それに何とも氣付かぬとは、何處まで濫太いのか。「これによつて、皆人の地獄に落ちて苦を受けんことをば、何とも思はず、又淨土に参りて、無上の樂を受けんことをも、分別せずして」等とは如何にも嚴しい御慈悲の鞭であります。